The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	研究室紹介 ： 人間科学部・社会心理学講座
Author(s)	古川, 秀夫
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 1988, 71, p. 133-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/65810
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究室紹介（人間科学部・社会心理学講座）

私たちの講座は、濱口恵俊教授以下・有馬淑子助手・古川秀夫技官・吉岡由紀及秘書４人のスタッフと、博士課程前期・後期の大学院生・研究生が各１人・３人・１人、そして学部学生が、４年生17人・３年生５人と、総勢31人からなります。研究室にはNECのパソコンＰＣ98シリーズを４台備え、うち１台は専用回線で情報処理教育センターに、残り２台はモデムを通して、それぞれ300、1200bpsの電話回線を通じ大型計算機センターに接続させています。大型計算機センター端末として用いる際は、TSS用のインテリジェント・ターミナル・ソフト『ASTER』のお世話になっています。日常の大型計算機利用形態としては、人間科学部に付属する計算機室、あるいはセンターでの端末を用いることがふつうです。

講座に配属された３年生は５月時点で、簡単な実験を素材にしてBASICプログラムとキー・ボード操作の初歩を習得します。６、７月の２ケ月は質問紙調査を扱います。各自独力で質問項目文を作り、ワープロ入力、及び印刷をし、質問票を完成します。夏期休暇中に質問紙調査を行います。９月にはいって、そのデータをもとに、カード・イン・システムでの統計パッケージSPSSを用いたデータ解析の基礎を実習します。統計パッケージSPSSはすでに10版を数えます。それはSPSSXと呼ばれ、きわめて広範な改訂が加えられています。ただし、SPSSXは旧版とのシステム・ファイルの互換性がなく、さらに、本学計算機センターで用いる際にはジョブ制御文も全く異なったものとなっています。それゆえ、現在のところ本研究室での実験・実習ではほぼ旧版に拠ります。旧版の習得には二つばかりメリットがあります。社会心理学のような人間の意識・行動を扱う研究分野ではメトリカルなデータだけでなく、YesかNoかの質的データを扱うことが少なくありません。そのようなデータの解析には前統計数理研究所所長の林知己夫氏によって開発された数量化理論Ⅰ～Ⅳ類が有効です。数量化理論Ⅰ～Ⅳ類は本学計算機センターでサポートされている統計解析システムSTATPACの中にも収められていますが、その習得は１からはじめなくてはなりません。昨年より大学間ネットワーク電話料が無料となり、拠点大学の計算機センターを学内計算機センターと同じような手軽さで使えるようになりました。京大計算機センターのSPSS旧版には数量化理論Ⅰ～Ⅳ類のプログラムが備えられていて、SPSS旧版の知識に加え、若干のジョブ制御言語を憶えればわりと簡単に使用できます。もうひとつのメリットは、大型計算機センターでサポートされている統計パッケージ共通に言えることですが、実験データの解析に使えることです。社会心理学の実験は、せいぜい３要因ぐらい、次元数も高・中・低の３つぐらいです。１つのセルに必要な被験者数は15人程度ですから、全体のデータはたかだかカード・イン・イメージで数百枚です。パソコンにより解析も大いにあり得ますが、「大は小を兼ねる」式で、多くの場合、SPSS中の分散分析等を実験データの解析に用います。

3年次後期には各学生の関心に即してテーマ設定を行い、卒業論文に準じたミニ卒論作成に向けて、実験・調査を実施します。4年生は遅くとも夏期休暇前には、ミニ卒論またはその反省を踏まえ、卒業論文のテーマを決定します。1月中旬の提出期限日をにらみながら、実証と理論の両作業を追求していきます。その間、スタッフの助言等を仰ぎつつも、基本的に1学生1テーマで個人の最大限の努力が期待されます。質問紙などの結果は、先ず自作のコード表に従ってデータ・マトリクスへとコーディングされます。大規模なプロジェクトの場合は磁気テープへの入力を外注することもありますが、実験で被験者百人、調査でもたかだか回答者千人、1人分のデータがカラム数で三百を越えることはまあないので、たいてい端末キーボードより直接データ・マトリクスを入力していきます。理想的には11月中に卒論題目提出とデータ解析を終え、図や表を作成しつつ原稿のマス目を埋めていきます。1昨年から、手書きによらないワープロ作成の卒論も許可されるようになりました。実験・実習でキーボード操作に慣れた本研究室の4年生はほとんどがワープロによる卒論を提出するようになりました。

大学院生は、学位請求およびその他の論文作成、あるいは学会発表を目標に、個人ないし共同研究を行い、若手研究者として自立していくための研鑽を積んでいきます。

ここまで述べてきたことで本講座での研究・教育の形式的側面はご理解いただけたと思いますが、次に研究の具体的内容について述べたいと男います。「社会心理学」というのは、その名称に表れていますように極めて多岐にわたる研究分野を含んでいます。社会学、心理学、人類学等の共通領域ひいては合併領域が研究対象にのぼります。ゆえに本講座での研究の全貌を一言で述べるのは至難の技であります。

最近の研究領域をお知らせするために、先ず昨年度提出された卒業論文のキーワードをリストアップしてみましょう。「コミュニケーションにおけるコンテクスト」「現代人の情報意識」「価値観とパーソナリティ」「都市化」「帰国子女の文化適応」「育児観・育児行動の日米比較」「意思決定における多数派集団の相互作用」「日本語における対人呼称」「TV・CMの効果性」などです。本年度の卒論テーマもこれ以上に多種多様なものですが、最終的な収束点がどこになるかは脱稿してのお楽しみといったところです。

スタッフ及び院生の研究については、教授の発案で今春創刊された講座内研究誌（ほぼDTP）で、その都度発表されることとなりました。まだ2号を数えるばかりですが、「行為の多面性と脈絡」「集合の巨視的行動パターン」「影響関係にもとづく集団理論」「日本人の排他主義」「分派結成と態度変容」「物語としての生活史」「ディス・コミュニケーション」「集団成員性と個人性」といったものがテーマとなっています。主任教授の年来の研究テーマは「日本文化論及び高度情報化社会論」で、今秋にも共同研究プロジェクトが予定され、講座としての取り組みが構想されているところです。

（記．古川秀夫）